

## ■ 海部観光大谷寮 仮設住宅試行プロジェクト

3.11 東日本大震災のあと、各県の被災地で建設されている仮設住宅。従来はプレファブ建築が主でした。そのプラスチックで冷たい素材でできた空間は、兵舎のように無機質な配置とあいまって、被災された方々が安らげる「すみか」にはなりえていませんでした。阪神大震災の際は仮設住宅での孤独死が話題になりましたし、まずもって住む人の「人としての尊厳」を維持できる環境が作れていたかどうか疑問です。この度の東日本大震災の被災地では、放射能汚染で人が住めない地域をもってしまった福島県をはじめ、プレファブでの仮設住宅供給がおいつかないいくつかの地域で、木造の仮設住宅がいろんな形で建設されています。

戦後の焦土からの復興、人工の都市集中という大きな流れの中、元来自然素材で作られてきた日本の住宅は、大量生産に都合のいい素材による工業製品の集合体に置きかえられてきました。同時に、田の字プランに代表される、可動間仕切りで臨機応変に使いまわせる家から、プライベート重視の個室の集合体へと、また、風通しの悪い、空調頼み、機械仕掛けの家へと変貌してしまいました。90年代からはシックハウス症候群という工業製品の負の面が表にでて、「自然素材がえり」がすすみ、人々には「人に優しい素材による、人のための家」を求める意識が高まっていたこともあり、この被災地での木造仮設住宅はあたたかく受け入れられているようです。

被災した地域に必要なのは、もちろん住まいであり生きられる場所です。が、その後に大事なものは「仕事」であり「収入」、つまりは雇用です。被災して即取り掛からねばならない仮設住宅を地元で供給できることは、短期とはいえ大きな雇用を生みます。木造ですから、まずは木材が必要です。設備機器や周辺のものには被災してない地域から調達するとして、できるだけ仮設住宅を校正する部材を「木製」で考えておくこと。その材料を、備蓄しておくこと、人力で簡単に建設できる工法を確立しておくこと。など、多くのことをクリアしなければなりません。自分達が使う仮設住宅を、徳島で準備しておくことには大きな意味があります。

現在、木造住宅に使われている木材には、特に乾燥を施さないグリーン材、人工乾燥材、天然乾燥材があります。工期を短縮するために、金物を締め付けることに頼りがちな木造住宅に未乾燥材をつかうことは、経年的乾燥収縮を考えれば最初から構造耐力に不安を持つことに他なりません。仮設住宅とはいえ構造材に使う材料は乾燥されたものでなければなりません。地場産材の利用促進は、昨年国の「木材の利用の促進」をうけて全国的に研究、実施が始まっています。まずは一年間に使用する県産材を公的資金で備蓄することです。一年分備蓄して、翌年からはその備蓄分を使います。新たに伐採した材はその翌年分の備蓄にする。少なくとも一年乾燥できるわけですから、基本的に天然乾燥材を使いまわせるサイクルが成立するはず。あとは、効率よく建設できて、人の住む環境としてよく考えられた、集落としての仮設住宅の様々な設計図書（設計案）、建設地の選択とそこでの集落として機能するような配置（建設地は事前に検討しておきたい。被災地ではこれが大问题）を提案できる建築家、施工者、材料供給者、職人のチームが寄り合って、県からの発注を受けられる体制を整備することです。

この度、海部観光(株)が阿南市内原町大谷で社員寮を建設します。快適な仮設住宅の必要性、それを地元徳島で準備することの意義をご理解いただいて、この社員寮を「徳島の木造仮設住宅の試行」として建設させていただけることになりました。林業関係者、材料供給者、工務店、職人さんたち、仮設住宅を供給する立場の行政の方々など、より多くの方々にかかわっていただき、東南海南海地震への「備え」を考え始める契機になれば幸いです。 内野輝明